

近代英語辞書の発達

三 輪 伸 春

目次

はじめに	206
第1章 OE期のラテン語辞書	208
第2章 初期近代英語辞書発達史	212
第3章 外国語と辞書	221
第4章 ルネッサンスと英語辞書発達史	226
第5章 初期の英語辞書：難解語辞書	
(1) Robert Cawdrey, <i>A Table Alphabeticall</i> (1604)	236
(2) John Bullokar, <i>An English Expositor</i> (1616)	236
(3) Henry Cockeram, <i>The English Dictionarie, or An Interpretor of Hard English Words</i> (1623)	239
(4) Thomas Blount, <i>Glossographia</i> (1656)	243
(5) Edward Phillips, <i>The New World of English Words</i> (1658)	246
(6) Elisha Coles, <i>An English Dictionary</i> (1676)	249
(7) John Kersey, <i>A New English Dictionary</i> (1702)	254
(8) Nathan Bailey, <i>An Universal Etymological English Dictionary</i> (1721)	254
(9) Nathan Bailey, <i>Dictionarium Britannicum or a more COMPLEAT UNIVERSAL ENGLISH DICTIONARY</i> (1730)	254
(10) T. Dyche & W. Pardon, <i>A New General English Dictionary</i> (1735)	254
(以上, 本号: 以下, 次号)	

(11) ジョンソンの辞書

Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755)

(12) C. Richardson, *A New Dictionary of the English Dictionary* (1836-37)(13) T. Sheridan, *A General DICTIONARY OF
THE ENGLISH LANGUAGE* (1780)(14) J. Walker, *A Critical Pronouncing Dictionary* (1791)

第6章 近代英語辞書に掲載されたギリシア借用語

1. 序

2. コードリの辞書に掲載されたギリシア語の特質

表1, 表2, 表3

参考文献

はじめに

世界中のどの国よりも、イギリス、アメリカには優れた辞書が数多く出版されてきた。日本における英語関係の辞書が、フランス語、ドイツ語、イタリア語を始め、他のどの外国語の辞書に比べても、質の面、量の面、あるいは種類の多さという点でも、格段に優れた辞書が出版されているのは、他の言語に比べて英語の学習者人口が多く需要が多いということもあろうが、本場のイギリス、アメリカで優れた辞書が多数出版されているということが大いに関係している。イギリスのオックスフォード系の辞書、アメリカのウェブスター系の辞書を始めとして英語圏で出版されている質量ともに優れた辞書を参考にできるので、日本における英語の辞書出版は他の外国語辞書に比べて盛んであるといえる。

では、どうして英語圏に辞書出版が盛んであろうか。それは英語という言語が辿ってきた歴史と深く関連する。すなわち、英語はその歴史の最初期から現代英語に至るまでその時期その時期ごとに絶えず辞書を必要とする事情があった。その歴史上、絶え間なく辞書を必要とする風土が、数多くの辞書を生みだ

し、結果として、イギリス、アメリカを辞書先進国にした。

イギリス、アメリカの辞書編纂の技術は優れている。歴史的に見て、特にイギリスの辞書が優れた歴史を持っている。が、歴史的な事件の多くがそうであるように、イギリスの辞書編纂の技術も一朝一夕にして完成されたのではない。英語は正にその歴史の始まりと共に辞書を持ち、以来今日に至るまで営々として辞書の編纂出版に努力を惜しまなかった。その結果、多くの優れた英語辞書が産み出されてきた。

OED (The Oxford English Dictionary) の最初の編集者であるマレー (J.A.H. Murray) は、イギリスにおける辞書 (編纂史) 研究の先駆的研究である、*The Evolution of English Lexicography* (1900) で次のようにいう。

For, the English Dictionary, like the English Constitution, is the creation of no one man, and of no one age; it is a growth that has slowly developed itself adown the age. Its beginnings lie far back in times almost prehistoric. (...) As to their languages, they were in the first place and principally Latin: (...)

(J.A.H.Murray, *The Evolution of English Lexicography*, 1900, p. 7)

(というのは、英語の辞書は、イギリスの憲法と同じように、一人の人が創りあげたのでもなければ、ひとつの時代に創りあげられたのでもない。時代を経るにしたがって自ずから、ゆっくりと成長してきたのである。その起源は遙か英語史以前に遡る。対象となった言語は、最初に、そして、主にラテン語であった。)

OE 期に始まり ME 期にかけて、ラテン語辞書を初めとしてフランス語辞書も多数出版され、それ以後、外国語—英語辞書は発展の一途を辿る。そして、ついに1604年に、辞書史上画期的な事件である、英語を英語で説明した辞書、すなわち、英語の国語辞書が初めて出版される。多くの歴史的な事件がそうであるように、この辞書は全く唐突に、自然発生的に生み出されたのではなく、先行する時代の流れの中で、外国語辞書が次々と編纂出版され続けてゆくうちに、

徐々に意識と経験が培われ、積み重ねられ、十分に基盤整理がなされた上で編纂出版されたのである。

古期英語以来やむことなく出版され続け、徐々に編纂技術を高めてきた外国語辞書編纂の経験の蓄積、古期英語以来、流入し続ける外国語を習得しなければならないという英語独特のやむにやまれない事情、流入し続ける外国語への深い関心、逆に、流入し続ける外国語への反発から生まれた国語愛護の意識、ルネッサンスによって生じた、古典語であるギリシア語、ラテン語、あるいはフランス語との比較から認識された英語の向上化運動、といった要因が背景にあって始めて英語の辞書の誕生と発展が実現し得たと考えなければならない。本章では、英語辞書の発生と発展の背景となった色々な要因を考えてみる。

第1章 OE期のラテン語辞書

古期英語期に既に、ラテン語の写本の難解な部分に易しいラテン語、もしくは古英語で施されたグロス (gloss) と言われる「行間の注解 (interlinear glosses)」, そしてテキストのあちらこちらに加えられた注解を集めた「注解語彙集 (glossary)」と称される、辞書の原点を思わせるものがある。例えば、スキートの *Oldest English Text* (EETS, OS.83, 1885) には *Epinal-Erfurt-Corpus*, *Leiden Glosses*, *Lorica-Glosses*, *Bedes' Glosses*, *Vespasian Psalter* といった最初期の注解集が収録されている。以下の例は、子供達にラテン語を教えるために作成された11世紀前半の *Æfric's Colloquy* (West-Saxon) に見られる、OE=ラテン語の対訳である (【 】は筆者加筆、以下同じ)。

Hæfst þu hafoc ?

Habes accipitrem ?

【Do you have a hawk ?】

Ic hæbbe.

Habeo.

【I have】

Canst þu temian hiȝ ?

Scis domitare eos ?

【Can you tame it ?】

Ȝea ic cann. Hƿæt sceoldon hiȝ me buton ic cupe

Etiam, scio. Quid deberent mihi nisi scirem

【Yes, I can. What should they give me unless I could】

temian hiȝ ?

domitare eos ?

【Tame them ?】

(*Æfric's Colloquy*, ll. 127-130, Methuen's Old English Lib.

ed. by G. N. Garmonsway, 1975)

ひとつの写本にでてくるこのような行間注釈を集めれば、単語の意味を調べるのに個々の写本に立ち戻らなくても済む、また学生がラテン語の単語を覚える手助けとなる。これが「注解語彙集 (グロッサリー)」の第1段階であり、*Leiden Glosses* がこの例である。

Item de ecclesiastica storia.

Colomellas : lomum.

carbunculi : poaas.

labrum, ambonem : heat.

pruriginem : bleci.

publite (poplite) : hamme.
 editiones : thestisuir
 fibrarum : darmana.
 sescuplum : dridehalpf.

(*Leiden Glosses*, Skeat, *Oldest English Text*, p. 111)

個々の写本の語彙を集めたものから、一步を進めたのが、各単語の語頭のアルファベットによりまとめた語彙集であり、*Epinal-Erfurt Corpus* にその例を見ることができる。これが第2段階。

【ラテン語】 : 【英語】

clibosum(v) : clibecti.
clustella : clustorloc.
cladica : wefl vel owef.
clinici : faertyted.
clavus caligaris(-ius) : scohnegl
clas(s) is : flota.
clatrum (clathri) : pearuc
clabatum(v) : gebyrded.

(*Epinal-Erfurt Corpus*, Skeat, *Oldest English Text*, p. 51)

第3段階は、各単語の2番目の文字までのアルファベット順配列、そして3番目まで、と続く。その例は8世紀初頭の *Corpus Glossary* である。このような過程を経てできあがったアルファベット順グロッサリーが、17世紀初頭の英語辞典、即ち、難解語辞書の原型である。

ラテン語は口伝えに教えられていったので、これらのグロッサリーは、最初、ラテン語の単語を暗唱し易いように主題別にまとめられていた。この種の語彙

集はグロッサリーと別の系統をなす。例えば、身体部位、家畜、野生動物、魚類、木や植物等々。この段階は、言わば OE 語彙集の第 1 歩で、*Leiden Glosses* にこの例を見ることができる。

verba de multis.	
Fors	: uryd.
glis	: egele.
damma (dama)	: elha.
aleo	: tebl.
(...)	

(*Leiden Glosses*, Skeat, *Oldest English Text*, p. 115)

1553語を収める植物の語彙集の例。

1. Abstinthium. i. weremod
2. Absenti. i. Aloxomis
3. Abditus. i. ason. uel iouis barba.
4. Ablata. i. purgatorium simulat.

(*The Laud Herbal Glossary*, ed. by J.R.Stracke, 1974)

見出し語を主題別にまとめて配列することは、第 5 章 (6) で述べる 17 世紀のコールズの英語辞書 (1676 年) の原型である。OE 期から ME 期にかけての行間註解やラテン語—英語語彙集の伝統は 16 世紀前半まで続く。

辞書の形態を持ったもっとも初期のラテン語—英語辞書として知られているのは、*Medulla Grammacie (Grammatices)*, c.1460) である。この辞書には多数の写本はあるが印刷されたことはなかったらしい。1500 年には、キャクストンの 1 番弟子であるウィンキン・ド・ウォルド (Wynkyn de Worde) が、*[H]ortus Vocabulorum* というラテン語辞書を印刷出版した。この辞書は 16 世紀初めに広

く用いられた。

OE期のラテン語—英語辞書に、既に初期近代英語期の英語辞書の雛形が完成されていたといえよう。

第2章 初期近代英語辞書発達史

16世紀に入ると、増え続けるラテン語、フランス語からの借用語に対応するために、ラテン語—英語辞書、フランス語—英語辞書は発展の一途を辿り、ついには外形、収録語彙数に関する限り、現在の中型から大型辞書に見劣りのしない辞書が何種類も編纂出版された。例えば、英語史上初めて辞書の表題の中に、dictionaryの文字を用いた、トーマス・エリオット卿 (Sir Thomas Elyot) の、*The Dictionary of syr Thomas Eliot knyght* (1538) である。この辞書はすぐれた辞書であり、ラテン語—英語辞書に限らず、後世の辞書に大きな影響を与えた。この辞書の第1の特徴は古典ラテン語を対象としたことである。エリオット以前にもラテン語の辞書はあったが、それらはみな中世ラテン語を扱っていた (例えば、*Catholicon Anglicanum*, *Medulla Grammaticae*, [*H*]ortus *Vocabulorum*)。ギリシア、ラテンの古典文芸再評価を目指すルネッサンス運動の影響のもとに初めて古典ラテン語を扱った辞書を編纂したエリオットは、1502年に出版されたカレパイン (Ambrosius Calepinus) の *Dictionarire des langues latine, italienne, etc.* を手本として、古典ラテン語の諸作品から自らの読書に基づき、権威ある作家の語彙、語句を多数収録した。最初の4頁 (1頁2段組み) の平均収録語数は70語であるから、辞書全体の総語数は約24,150語ということになる。個々の作品の注解集、語彙集ではなく、古典ラテン語の語彙を網羅的に収録した編纂方針はその後のラテン語辞書編纂の方針となった。

エリオットは最初の原稿を印刷所に手渡した後も完成した原稿を不満としていた。エリオットの不満を耳にしたヘンリー8世は、エリオットを励まし、王室図書館の利用をすすめた。そこでエリオットは、直ちに印刷を止めさせるとともに、Mの項以降を全面的に書き直した。印刷の済んでいたMより前の部

分は、巻末に、“The Addicion of syr Thomas Eliot Knight vnto his Dictionarye”として付加された。

付加された Addicion の冒頭部分。

ABAGIO, gere, to serche a compasse in speaking, and not to consist or abide in one oratio or snetêense.

Abalienatio, alternation.

Abalienater, he that doth aliene or putte away a thinge, or altereth the possession thereof, an alienour.

(*The Dictionary of syr Thomas Eliot Knyght, 1538*)

ローマ数字による頁付け (No.) は途中36頁 (No. I ~No.XXXVI) までと、飛んで39頁と40頁のみ (No. XXXIX, No. XL) であるが、辞書本体272頁と Addicion 74頁を加えて全部で約345頁。

エリオットの辞書は、1542年、1545年、1559年にクーパー (Reverend Thomas Cooper) による改訂版を出している。そのクーパーは、エリオットの辞書を吸収して更に大部な辞書を出版した。それが、

T.Cooper, *Thesaurus Linguae Romanae et Britannicae* (1565)

である。クーパーの辞書の1578年版はフォリオ版1,300頁余りもある大部なものである。頁数で言えば、*OED* 第2版 (平均頁1,000頁) 1冊分以上あることになる。古典ラテン語のキケロ、ヴァージル、テレンス、タキトウス、ホラチウス、プリニウスといった著名作家から、単語、成句を多く収録し、それにいちいち英語訳をつけていった。アルファベット順に配列し、大きい見出し語をたてて、その単語を含む熟語、成句は、その単語の下に頭を下げて配列するという工夫も見られる。例えば、Mare “海” の項は、

Mare, maris, n. g.	The sea
Accessus maris.	The flowing of the sea. Vide ACCEDO.
Acquor maris. Virg.	The playne broadeness of the sea.
(...)	
Aspera maris. Tacit.	Troublous places of the sea.
Rabies maris. Virg.	The raging temper of the sea.
Via tuta maris. Ouid.	The safe passage of the sea.
(...)	
Importuosun mare. Tacit.	A sea that hath no conuenient havens.
Iratum. Horat.	The sea tempestuous and troublous.
(...)	
collucer mare a sole. Cicero.	The sea glittering with sunne beame.

(T. Cooper, *Thesaurus Linguae Romanae et Britannicae*, 1578年版, Mare)

という具合に始まり, Mare だけで約80項目を収め, そのほとんどに英語訳を付けていて, 英語の表現辞典としても十分に有用である。現に, シェイクスピア, マーロー, スペンサー, ベン・ジョンソン等はこの辞書に大きな恩恵を受けたとされている。主見出し語の下に成句を追込みで載せることは後のコールズ (E. Coles, 1676) の原型となっている。巻末には150頁にわたる付録があり, 国名, 人名, 河川名, 都市名, 民族名をかなり網羅的に収録し, 説明を加えている。その例。

Aborigines, or Aborigenes, People which first helde the country about Rome, and lyued abroade, hauing no house. They may also be taken for any other people, whose beginning in not knowne.

(Rev. Thomas Cooper, *Thesaurus Linguae Romanae et Britannicae*,

1578年版, 付録1頁目)

